

日蓮大聖人御書全集

たかはしにゆうどうどのごへんじ

高橋入道殿御返事

新版
1954
〜
1960

たかはしにゆうどうどの「へんじ

高橋入道殿御返事

けんじがんねん

がつにち

さい

たかはしろうひようえ

建治元年('75)

7月12日

54歳

高橋六郎兵衛

しんじよう

たかはしにゆうどうどの「へんじ

にちれん

進上 高橋入道殿御返事

日蓮

われ

じぶんだいかくせそん

にんじゆひやくさい

ときちゆうてんじく

しゆつげん

我らが慈父・大覚世尊は、人寿百歳の時、中天竺に出現

いつさいしゆじよう

いちだいしろうぎよう

説

たも

しましまして、一切衆生のために一代聖教をとき給う。

ほとけざいせ

いつさいしゆじよう

かこ

しゆくじゆうあ

ほとけ

えん

厚

仏在世の一切衆生は、過去の宿習有つて仏に縁あつか

とくどうな

わめつご

しゆじよう

りしかば、すでに得道成りぬ。「我が滅後の衆生をばいか

歎

たま

はちまんしろうぎよう

もんじ

んがせん」となげき給いしかば、八万聖教を文字となし

いちだいしようぎよう

なか

しようじようきよう

かしようそんじや

讓

て、一代聖教の中に小乗經をば迦葉尊者にゆずり、

だいじようきよう

ほけきよう

ねはんとう

もんじゆしりぼさつ

大乘經ならびに法華經・涅槃等をば文殊師利菩薩にゆず

たも

はちまんしようぎよう

かんじん

ほけきよう

がんもく

り給う。ただし、八万聖教の肝心・法華經の眼目たる

みようほうれんげきよう

ごじ

かしよう

あなんとう

たま

妙法蓮華經の五字をば、迦葉・阿難等にもゆずり給わず、

もんじゆ

ふげん

かんのん

みろく

じぞう

りゆうじゆとう

だいぼさつ

また文殊・普賢・觀音・弥勒・地藏・竜樹等の大菩薩にも

授

たま

だいぼさつとう

望

もう

さずけ給わず。これらの大菩薩等ののぞみ申せしかども、

ほとけ

許

たま

だいじ

そこ

じようぎようぼさつ

もう

ろうにん

仏ゆるし給わず。大地の底より上行菩薩と申せし老人を

め

出

たほうぶつ

じつぽう

しよぶつ

みまえ

しやかによらい

召しいだして、多宝仏・十方の諸仏の御前にして、釈迦如来、

しつぽう

とうちゆう

みようほうれんげきよう

ごじ

じようぎようぼさつ

七宝の塔中にして妙法蓮華經の五字を上行菩薩にゆず

たも

り給う。

ゆえ

わ めつご

いつさいしゅじょう

みなわ

こ

その故は、我が滅後の一切衆生は皆我が子なり。いずれ

びようどう

ふびん

思

くすし

なら

やまい

も平等に不便におもうなり。しかれども、医師の習い、病

したが

くすり

授

わ

めつごごひやくねん

あいだ

に随つて薬をさずくることなれば、我が滅後五百年が間

かしよう

あなんとう

しようにうきよう

くすり

いつさいしゅじょう

は、迦葉・阿難等に、小乗経の薬をもつて一切衆生に

与

つぎ

ごひやくねん

あいだ

もんじゅしりぼさつ

みろくぼさつ

あたえよ。次の五百年が間は、文殊師利菩薩・弥勒菩薩・

りゆうじゅぼさつ

てんじんぼさつとう

けこんぎよう

だいにちきよう

はんにやきようとう

くすり

竜樹菩薩・天親菩薩等、華嚴経・大日経・般若経等の薬

いつさいしゅじょう

授

わ

めつごいつせんねん過

ぞうほう

とき

を一切衆生にさずけよ。我が滅後一千年すぎて像法の時

やくおうぼさつ

かんぜおんぼさつとう

ほけきよう

だいもく

のぞ

よ

には、薬王菩薩・観世音菩薩等、法華経の題目を除いて余の

ほうもん くすり いっさいしゅじょう

まつぼう い

かしよう

法門の薬を一切衆生にさずけよ。末法に入りなば、迦葉・

あなんとう もんじゅ みろくぼさつとう やくおう かのんとう

讓

阿難等、文殊・弥勒菩薩等、藥王・觀音等のゆずられしところ

しょうじようきよう だいじようきよう

ほけきよう

もんじ

ろの小乗經・大乘經ならびに法華經は、文字はありと

しゅじよう やまい くすり

やまい おも

も衆生の病の薬とはなるべからず。いわゆる、病は重し

くすり 浅 とき じようぎようぼさつしゅつげん

みようほうれんげきよう

薬はあさし。その時、上行菩薩出現して、妙法蓮華經の

ごじ いちえんぶだい いっさいしゅじよう

授

五字を一閻浮提の一切衆生にさずくべし。

とき いっさいしゅじよう

ぼさつ

敵

その時、一切衆生、この菩薩をかたきとせん。いわゆる、

猿 犬 見

きじん ひと 怨

さるのいぬをみるがごとく、鬼神の人をあだむがごとく、

かこ ふきようぼさつ いっさいしゅじよう

罵 怨

過去の不輕菩薩の一切衆生にのりあだまれしのみならず

じようもく

がりやく

責

かくとくびく

さつがい

およ

杖木・瓦礫にせめられし、
覺徳比丘が殺害に及ばれしがご

とくなるべし。

とき

かしよう

あなんとう

りようぜん

隠

ごう

その時は、迦葉・阿難等も、あるいは靈山にかくれ、恒

がもつ

みろく

もんじゆとう

とそつ

ないいん

い

河に没し、弥勒・文殊等も、あるいは兜率の内院に入り、

こうせん

い

たま

かんぜおんぼさつ

さいほう

帰

あるいは香山に入らせ給い、觀世音菩薩は西方にかえり、

ふげんぼさつ

とうほう

たも

しよきよう

ぎよう

ひと

普賢菩薩は東方にかえらせ給う。諸経は、行ずる人はあ

しゆご

ひと

りしよう

しよぶつ

みようごう

りとも、守護の人なければ、利生あるべからず。諸仏の名号

とな

てんじん

加護

は唱うるものありとも、天神これをかごすべからず。ただ、

こうし

はは

離

きんちよう

鷹

遭

小牛の母をはなれ、金鳥のたかにあえるがごとくなるべし。

その時、十方世界の大鬼神、一閻浮提に充滿して、四衆の

とき じつぼうせかい だいきじん いちえんぶだい じゅうまん ししゅ
み い ふぼ 害 きょうだいとう うしな

身に入り、あるいは父母をがいし、あるいは兄弟等を失わ

こと こくちゅう ちしや じかい そうに こころ

ん。殊に国中の智者げなる持戒げなる僧尼の心にこの

きじん い こくしゅ しんげ 誑 とき

鬼神入つて、国主ならびに臣下をたぼらかさん。この時、

じようぎよう ぼさつ おん 加被 蒙 ほけきよう だいもく

上行菩薩の御かびをかぼりて、法華經の題目・

なんみようほうれんげきよう ごじ いっさいしゅじよう 授 か

南無妙法蓮華經の五字ばかりを一切衆生にさずけば、彼の

ししゅとう だいそうとう ひと 怨 ふぼ 敵

四衆等ならびに大僧等、この人をあだむこと、父母のかたき、

しゅくせ ちようてき おんてき

宿世のかたき、朝敵・怨敵のごとくあだむべし。

とき おお てんぺん にちがつしよく

その時、大いなる天変あるべし。いわゆる、日月蝕し、

おお すいせいてん

だいじしんどう

すいじよう

わ

大いなる彗星天にわたり、大地震動して水上の輪のごとく

のち

じかいほんぎやくなん

もう

こくしゆ

きようだい

なるべし。その後は、自界叛逆難と申して、国主・兄弟な

こくちゆう

だいにん

う

殺

のち

たこくしんぴつなん

もう

らびに国中の大人を打ちころし、後には、他国侵逼難と申

りんごく

責

生

捕

して、隣国よりせめられて、あるいはいけどりとなり、あ

じさつ

こくちゆう

じようげばんみん

みなだいく

あ

るいは自殺をし、国中の上下万民、皆大苦に値うべし。こ

じようぎようぼさつ

加被

蒙

ほけきよう

だいもく

れひとえに、上行菩薩のかびをこうぼりて法華經の題目

弘

もの

罵

打

張

をひろむる者を、あるいはのり、あるいはうちはり、ある

るぎい

いのち

断

ぶつぜん

いは流罪し、あるいは命をたちなんどするゆえに、仏前に

誓

ぼんてん

たいしやく

にちがつ

してんとう

ほけきよう

ざ

ちかいをなせし梵天・帝釈・日月・四天等の、法華經の座

せいじよう

た

ほけきよう

ぎようじゃ

怨

ひと

ふぼ

にて誓状を立てて「法華經の行者をあだまん人をば、父母

敵

強

戒

誓

故

のかたきよりもなおつよくいましむべし」とちかうゆえな

見

そうろう

いま

にちれん

にほんこく

う

いつさいきよう

りとみえて候に、今、日蓮、日本国に生まれて、一切經

ほけきよう

みようきよう

にほんこく

いつさいしゆじよう

おもて

ならびに法華經の明鏡をもつて日本国の一切衆生の面

ひ

む

すんぶん

違

うえ

ほとけ

き

たま

に引き向けたるに、寸分もたがわぬ上、仏の記し給いし

てんぺん

ちよう

天変あり地天あり。

さだ

くにぼうこく

予

知

定めてこの国亡国となるべしとかねてしりしかば、これ

こくしゆ

もう

こくどあんのん

尋

明

を国主に申すならば、国土安穩なるべくば、たずねあきら

ぼうこく

もち

もち

むべし。亡国となるべきならば、よも用いじ。用いぬほど

にちれん るざい しざい 知 そうら

ならば、日蓮は流罪・死罪となるべしとしりて候いしかど

ほとけ 誠 のたま

も、仏いましめて云わく「このことを知りながら、身命

惜 いっさいしゅじよう 語

をおしみて一切衆生にかたらずば、我が敵たるのみなら

いっさいしゅじよう おんてき かなら あびだいじよう お

ず、一切衆生の怨敵なり。必ず阿鼻大城に墮つべし」と

き たま

記し給えり。

にちれん しんたい 煩

ここに日蓮、進退わずらいて、このことを申すならば我が

もう わ

み わ み

身いかにもなるべし、我が身はさておきぬ、父母・兄弟な

ふ ぼ きようだい

せんまんにん なか いちにん したが

らびに千万人の中にも一人も随うものは、国主・万民に

こくしゅ ばんみん

怨 かけ

あだまるべし。彼らあだまるるならば、仏法はいまだわきま

ぶつぽう 弁

えず、人のせめはたえがたし。仏法を行ずるは安穩なるべ
ひと 責 堪 ぶつぽう ぎよう あんのん

しとこそおもうに、この法を持つによつて大難出来するは、
思 ほう たも だいなんしゅつたい

しんぬ、この法を邪法なりと誹謗して悪道に墮つべし。こ
知 ほう じゃほう ひぼう あくどう お

れも不便なり。またこれを申さずば、仏誓に違する上、一切
ふびん もう ぶつせい い うえ いっさい

衆生の怨敵なり。大阿鼻地獄疑いなし。いかんがせんと
しゅじよう おんてき だいあびじごくうたが

おもいしかども、おもい切つて申し出だしぬ。
思 思 き もう い

申し始めし上は、またひきさすべきにもあらざれば、い
もう はじ うえ 引 止

よいよつより申せしかば、仏の記文のごとく、国主もあだ
強 もう ほとけ きもん こくしゅ 怨

み、万民もせめき。あだをなせしかば、天もいかりて日月に
ばんみん 責 てん 怒 にちがつ

だいへん

だい 彗

星

しゅつげん

だいじ

震

返

大變あり。大せいせいも出現しぬ。大地もふりかえしぬべ

同 士 打

始

たこく

責

ほとけ

くなりぬ。どううちもはじまり、他国よりもせめたり。仏

きもん 少

違

にちれん

ほけきよう

ぎようじや

の記文すこしもたがわず、日蓮が法華經の行者なることも

うたが

疑わず。

こそ

鎌

倉

所

逃

い

そうら

ただし、去年、かまくらよりこのところへにげ入り候い

とき

どう

そうら

おのおの

もう

そうら

もう

し時、道にて候えば、各々にも申すべく候いしかども、申

せんど

ごへんじ

もう

そうら

すこともなし、また先度の御返事も申し候わぬことは、

別

しさい

そうら

こと

おのおの

隔

べちの子細も候わず。なに事にか各々をばへだてまいらせ

そうろう

怨

ねんぶつしや

ぜんしゆう

しんごんしとう

候べき。あだをなす念仏者・禅宗・真言師等をも、なら

こくしゅとう

助

もう

彼

怨

びに国主等もたすけんがためにこそ申せ、かれらのあだを

ふびん

そうら

いちにち

わ

方

なすは、いよいよ不便にこそ候え。まして、一日も我がかた

こころ 寄

ひとびと

疎

せけん

とて心よせなる人々は、いかんがおろかなるべき。世間の

恐

さいし

ひとびと

遠

殊

よろこ

おそろしさに妻子ある人々のおざかるをば、ことに悦ぶ

み

にちれん

つ

助

方

うえ

身なり。日蓮に付いて、たすけやりたるかたはなき上、わ

しよりよう

め

しさい

知

さいし

しよじゅう

ずかの所領をも召さるるならば、子細もしらぬ妻子・所従

とう

歎

こころ

苦

等がいかなげかんずらんと心ぐるし。

こぞ

にがつ

ごかんき

許

さんがつ

じゅうさんにち

しかも、去年の二月に御勘気をゆりて、三月の十三日に

さどのくに

た

どうげつ

にじゅうろくにち

鎌

倉

い

どうしがつ

佐渡国を立ち、同月の二十六日にかまくらに入り、同四月の

ようか へい 左衛門 じよう 会 とき 様 々 こと

八日、平のさえもんの尉にあいたりし時、ようようの事ど

問 なか もうここく 寄 もう

もといし中に、「蒙古国は、いつよすべき」と申せしかば、

ことし 寄 にちれん 離 にほんこく 助

「今年よすべし。それにとて、日蓮はなして日本国にたすく

ものいちにん 思 にほん

べき者一人もなし。たすからんとおもいたうならば、日本

こく ねんぶつしや ぜん りつそうとう くび き 由比 浜 懸

国の念仏者と禅と律僧等の頸を切つてゆいのはまにかくべ

いま 過 みなひと 思 そうろう にちれん

し。それも今はすぎぬ。ただし、皆人のおもいて候は、日蓮

ねんぶつ ぜん りつ 謗 そうろう もの

をば念仏と禅と律をそしるとおもいて候。これは物の

数 数 しんごんしゆう もう しゆう 麗 にほん

かずにてかずならず。真言宗と申す宗がうるわしき日本

こく おお じゆそ あくほう こうぼうだいし じかくだいし

国の大いなる呪咀の悪法なり。弘法大師と慈覚大師、この

惑

くに ほろ

にねん

ことにまどいて、この国を亡ぼさんとするなり。たとい二年

さんねん

破

くに

しんごんし

祈

三年にやぶるべき国なりとも、真言師にいのらするほどな

いちねん

はんとし

くに責

もう

聞

そうら

らば、一年、半年にこの国せめらるべし」と申しきかせ候

いき。

助

もう

ほど 怨

たすけんがために申すを、これ程あだまるることなれば、

許

そうら

とき

佐渡

くに

さんちゆう

かいへん

ゆりて候いし時、さどの国よりいかなる山中・海辺にも

紛

い

ひとたびへいのさえもん

まぎれ入るべかりしかども、このことをいま一度平左衛門

もう

聞

にほんこく

責

残

しゅじよう

助

に申しきかせて、日本国にせめのこされん衆生をたすけん

上

そうら

もう

聞

そうら

のち

がためにのぼりて候いき。また申しきかせ候いし後は、

鎌倉あ

あし 任 出

かまくらに有るべきならねば、足にまかせていでしほどに、

びんぎ そうら おのおの 厭 たも いま

便宜にて候いしかば、たとい各々はいとわせ給うとも、今

いちど 見 ちたび 思 こころ こころ

一度はみたてまつらんと、千度おもいしかども、心に心を

戦 過 そうら

たたかいて、すぎ候いき。

駿河 くに こうのとの ごりよう 殊 富士

そのゆえは、するがの国は守殿の御領、ことにふじなん

ご けあま 御 前 うち ひとびとおお こさいみようじどの ごくらくじどの

どは後家尼ごぜんの内の人々多し。「故最明寺殿・極楽寺殿

おん 敵 憤 たも 聞 付

の御かたき」といきどおらせ給うなれば、ききつけられ

おのおの おん 歎 思 こころ 今

各々の御なげきなるべしとおもいし心ばかりなり。いまに

至 ふびん 思 そうら ごへんじ

いたるまでも不便におもいまいらせ候えば、御返事までも

もう そろそろ

ごぼう

行 摺

申さず候いき。この御房たちのゆきずりにも、「あなかし

富士 賀 島

辺 た 寄

こ、あなかしこ。ふじ・かじまのへんへ立ちよるべからず」

もう

そろそろ

覚 束

と申せども、いかが候らんとおぼつかなし。

しんごん

ごふしん

たま そろそろ

ただし、真言のことぞ御不審にわたらせ給い候らん。

ほうもん

もう

おんこころ 得

難

いかにと法門は申すとも、御心えあらんことかたし。ただ

がんぜん こと

し

眼前の事をもつて知ろしめせ。

おきのほうおう

にんのう はちじゅうにだい

じんむ

にせんよねん

隠岐法皇は、人王八十二代、神武よりは二千余年、

てんしやうだいじんい

替

たま

にんのう

たも

天照太神入りかわらせ給いて人王とならせ給う。いかなる

もの 敵

うえ

きんめい

おきのほうおう

至

かんど

者かてきすべき上、欽明より隠岐法皇にいたるまで、漢土・

ひやくさい しんら こうらい 渡 きた だいほう ひほう えいざん とうじ

百済・新羅・高麗よりわたり来る大法・秘法を、叡山・東寺・

おんじよう しちじ にほんこく 崇 置 そうろう

園城・七寺ならびに日本国にあがめおかれて候。これは

みな くに しゅご にくしゅ 守 おきのほうおう よ

皆、国を守護し国主をまぼらんためなり。隠岐法皇、世を

鎌 倉 取 くち惜 思 えいざん とうじ

かまくらにとられたることを口おしとおぼして、叡山・東寺

とう こうそうとう 語 よしとき いのち 召 取 ぎよう

等の高僧等をかたらいて、「義時が命をめしとれ」と行ぜ

いちなんにねん すうねんじようぶく ごんのだいぶ

しなり。このこと一年二年ならず、数年調伏せしに、権大夫

どの 知 いっぼう ぎよう たま

殿はゆめゆめしろしめさざりしかば、一法も行じ給わず。

ぎよう かな 覚 てんし 戦

また行ずとも叶うべしともおぼえずありしに、天子いくさ

負 たま おきのくに 遣 たも

にまけさせ給いて、隠岐国へつかわされさせ給う。

にほんこく

おう

ひと

てんしやうだいじん

みたま

い

替

日本国の王となる人は天照太神の御魂の入りかわらせ

たも おう

せんしやう

じゆうぜんかい

ちから

こくちゆう

給う王なり。先生の十善戒の力といい、いかでか国中の

ばんみん

なか

傾

失

罪

万民の中にはかたぶくべき。たといとがありとも、つみあ

親

とが

こ

怨

そうら

おや

るおやを失なき子のあだむにてこそ候いぬらめ。たとい親

じゆうざい

こ

み

とが

おこな

てん受

たも

に重罪ありとも、子の身として失に行わんに、天うけ給う

おきのほうおう

恥

遭

たま

べしや。しかるに、隠岐法皇のはじにあわせ給いしは、い

たいか

ほけきやう

おんてき

にほんこく

かなる大禍ぞ。これひとえに、法華経の怨敵たる日本国の

しんごんし

語

たま

故

真言師をかたらわせ給いしゆえなり。

いっさい

しんごんし

かんじやう

もう

しやかぶつとう

はちやう

れんげ

一切の真言師は、灌頂と申して、釈迦仏等を八葉の蓮華

描

あし

踏

ひじ

ふしぎ

にかきて、これを足にふみて秘事とするなり。かかる不思議

もの

しよさんしよじ

べつとう

仰

持

成

故

民

の者ども、諸山諸寺の別当とおおぎてもてなすゆえに、たみ

て

渡

げんしん

恥

遭

だいあくほう

の手にわたりて現身にはじにあいぬ。この大悪法、また

鎌

倉

くだ

ごいちもん

賺

にほんこく

亡

かまくらに下つて御一門をすかし、日本国をほろぼさんと

さいだいじ

でしとう

語

するなり。このこと、最大事なりしかば、弟子等にもかたら

偽

愚

ねんぶつ

ぜんとう

謗

ず、ただいっわりおろかにて念仏と禅等ばかりをそしりて

聞

いま

もち

しんみよう

惜

きかせしなり。今はまた用いられぬことなれば、身命もお

でし

もう

もう

ごふしん

しまず弟子どもにも申すなり。こう申せば、いよいよ御不審

にちれん

たつと

じかく

こうぼう

勝

あるべし。日蓮いかにいみじく尊くとも、慈覚・弘法にすぐ

るべきか。この疑うたがいすべてはるべからず。いかにとかすべ
き。

ただし、皆人みなひとはにくみ候そうろうに、すこしも御信用ごしんようのありし上うへ、

おん 訪

そうろう

こんじよう

おんこと

これまでも御たずねの候そうろうは、ただ今生ばかりの御事ごんじには

そうら

さだ

かこ

故

よも候わじ。定めて過去かこのゆえか。

ごしよろう

だいじ

たま

そうろう

浅

御所ごしの大事だいじにならせ給たまいて候そうろうなること、あさましく

そうろう

剣

敵

くすり

やまい

候。ただし、つるぎはかたきのため、薬くすりは病やまいのため。

あじやせおう

ちち

殺

ほとけ

かたき

あくそうみ

い

阿闍世王あじやせおうは父ちちをころし、仏ほとけの敵かたきとなれり。悪瘡あくそう身みに出いで

のち

ほとけ

きぶく

ほけきよう

たも

あくそう

へいゆ

いのち

て後、仏ほとけに帰伏きぶくし法華經ほけきようを持ちしかば、悪瘡あくそうも平癒へいゆし寿いのちを

しじゅうねん 延

ほけきよう

えんぶだい

ひと

やまい

も四十年のべたりき。しかも法華経は「閻浮提の人の病の

ろうやく

説

そうら

えんぶ

うち

ひと

やまい

み

良薬なり」とこそとかれて候え。閻浮の内の人病の身な

ほけきよう

くすり

り。法華経の薬あり。

さんじ

そうおう

いっしん

助

三事すでに相応しぬ。一身いかでかたすからざるべき。

おんうたが

おん

そうら

ちからおよ

ただし、御疑いの御わたり候わんをば、力及ばず。

なんみようほうれんげきよう

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

しちがつじゅうににち

にちれん

かおう

七月十二日

日蓮

花押

ごへんじ

御返事

かくじようぼう

伯

耆 ぼう

たびたび 読

聞

覚乗房・はわき房に度々よませて、きこしめせ、きこ

しめせ。